双子の兄が歩く道～ネギま！～

十六夜哀音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
双子の兄が歩く道～ネギま！～

【Ｎコード】
Ｎ６３３６Ｚ

【作者名】
十六夜哀音

【あらすじ】
※※※※ＰＣ閲覧推奨※※※※
ネギま好きだった俺はいつの間にか転生していた・・・
死んだ記憶はないし、テンプレした記憶も無い。だっていうのに赤ん坊！？
もう１人の赤ん坊は・・・ネギ・スプリングフィールド？
どうやら俺は双子の兄だそうだ・・・何故兄がネギじゃない！！
似非敬語で素を隠しながらネギま！を辿る？物語が今始まる・・・
※この物語は残酷な表現・アンチ？・ガールズラブ？等が含まれる

可能性がありますのでご注意下さい。【含まれていない可能性もあります】
ご都合主義に関して・・・これを用いない限り絶対に説明不能なことがあるのでタグを入れました。
尚、更新は不定期です。

1歩目～イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩く

1歩目は前作と同じです。
改行を増やしてみたのですがいかがでしょうか？

初めて読んでくださる方はこのままお読みいただけると嬉しいです。
※１２・２２若干修正

1歩目～イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩く

目の前に広がるのは闇夜を染める紅蓮の炎と灰色の塊が多数。

辺りを炎に包んだ元凶は既に目の前にいる男に殲滅された。

地に倒れて足を失っているが出血はなく、その失った部分が灰色に染まった女の前に俺ともう1人の子供が守るように立ちはだかる。

俺と子供の目の前には元凶を殲滅した男がローブを身にまとい、大きな杖を持って立っていた。

その男は俺たちの方へと動き出す。

「お前達・・・そうかお前達が・・・お姉ちゃんを守っているつもりか？」

もう1人の子供・・・弟は初心者用の杖を掲げるも、近づく男に恐怖して肩を震わせて目を瞑る。

俺はそんな弟の前に立ち、両手を広げた。

そう知っていれば怖くない。男の手がこちらに伸びても怖がることもない、その手は俺と弟の頭の上に乗せられる手なのだから。

「大きくなったな・・・お、そうだお前達に・・・この杖をやろう。俺の形見だ・・・一本しかねぇけどな・・・」

そう言って、頭を撫でた男は俺にその杖を手渡すが、それを受け取

った俺はすぐに弟へと杖を手渡した。

「お父さん・・・？」

そんな男の姿に弟は呟くが、俺から手渡された杖が重かったのだろうバランスを崩す。

「もう時間が無い・・・ネカネは大丈夫だ、石化は止めておいた。後はゆっくり治してもらえ。悪ぃな、お前達には何もしてやれなくて・・・」

男はそう言いながら空に浮かぶ。

「・・・お父さん？」

「こんなこと言えた義理じゃねぇが・・・元気に育て、幸せにな！！」

彼は何を想って此処に来たのか、どんな想いで此処から去らなくてはいけないのか俺にはまだわからない。

そして飛び去る男の背中を「お父さん！！」と叫び続けながら地を走る弟の背を俺はこの目に焼き付けた。

「卒業証書授与・・・この七年間よくがんばってきた！だが、これからの修行が本番だ。気を抜くではないぞ・・・ネギ・スプリングフィールド君！」

「ハイ！」

ここはメルディアナ魔法学校。今俺の目の前では卒業式が行われている。

今名前を呼ばれたのは俺の弟であるネギ・スプリングフィールドである。

そして、彼を弟と呼べる俺はアルク・スプリングフィールド、つまりはネギの双子の兄である。

何故双子の兄なのに、ネギの名前が俺の名前になっていないのか不明ではあるが、推察するに俺が転生者（イレギュラー）であることが原因ではないかと考えている。

俺は自称『転生者』である。何故自称かととわれれば、テンプレートのように神様の失敗で死んだ→好きな世界に転生させてあげる上に君の欲しい理解不能能力（チート）をプレゼントしよう！などといった記憶が一切ないのである。

要するに、現実（前世）で眠りに落ちて目を覚ませば魔法先生ネギま！（物語）の世界へと紛れ込んでしまっていたのである。

紛れ込んだといっても、主人公の兄として生まれてしまったのだが・・・

『現実』の記憶を持っているが、『物語』の中に存在する身体であるアルク・スプリングフィールドが寝ても覚めても、ネギ（原）が主役の世界（作）に居続ける、夢（現実に戻らない）から覚めないのであれば自身を『転生者』と表現してもおかしくはないであろう。

さて、よくあるテンプレ的なワンシーンの記憶が無いことから俺自身に『理解不能能力』はほぼ無いのではないかと考えているが、ネギの双子の兄であることから彼(か)の『千(サウザンド)の呪文の魔法使(マスター)い』と『災厄の魔女』の子であるとも言え、魔力総量は弟と同程度の可能性がある。

更にはこの七年間で、弟と禁書庫に篭ることで『雷の暴風』のような中級魔法いくつかをなんとか使えるようになってしまった辺り、弟と同程度の頭脳(才能)や開発力を持っていると考えられる。

そのせいだと思うが『現実』の頃とくらべるとかなり物覚えがよかったりもする。因みにいくつかの上級魔法も使えはしないが覚えてはいる。

これらの事から、俺が持つであろう『理解不能能力』を強いて上げるのであれば『物語』の知識とネギと同程度の『才能』ではないかと考えている。

因みに『現実』ではそんなに料理をしなかったのに、この歳でかなり美味い料理が作れるし、家事等もなんなくこなせる。ナイフ投擲・ある程度の体術が使えるようになっていたりもした。

これらは『理解不能能力』の一端の可能性もあるが、それは定かではない。

どことなくそんな人物を『現実』の別の物語(作品)で見たことがあるような気もするのだが・・・

そんなことを考えていると不意に名前を呼ばれていることに気づく。

「・・・ク君！・・・アルク君！アルク・スプリングフィールド君！」

「・・・ハイ？」

「全く、君はまた考え事をしていたのかね？卒業式だというのに変わらないのう・・・」

その言葉にふと、周囲を見ると隣にいるアーニャは溜息を吐き、ネギはあわあわと慌てた表情でこちらを見ていた。

どうやら校長に何度も名前を呼ばれていたらしい。

考え事をしているとどうにも周囲の音が脳に入ってこなくなってしまうのは悪い癖である。

卒業式という長いようで短い時間にそんなことなど考えなければいいのではあるが・・・

ようやく俺は校長の前に立ち、差し出された卒業証書を受け取った。

そして、俺達の卒業式は終わりを迎えた。

ネギ・アーニャと共に廊下へ出るとネカネ姉さんが待っていた。

卒業証書に浮かび上がる修行の地の確認であろう。

アーニャはロンドンで占い師、ネギは日本で先生をすることであろう。

恐らくは俺も『英雄の息子』という名のネームバリューを持っていることから日本で先生をすることが修行内容として卒業証書に浮かび上がるであろう。

「ネギ、アルク2人共何てかいてあった？私はロンドンで占い師よ」

案の定アーニャはロンドンで占い師であった。

「今浮かび上がるところ・・・お？」

ネギがアーニャに答えると、卒業証書に文字が浮かび上がっているところだった。

俺も卒業証書を見ると文字が浮かび上がってくる。

『Ａ　ＴＥＡＣＨＥＲ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ（日本で先生をすること）』

それと同時にネカネさんとアーニャ2人の「えぇ～～～～～～～～～～～！？」絶叫が廊下に響き渡る。

そして丁度前にいた校長に直訴を始めるネカネさんとアーニャ

「何かのマチガイではないのですか？１０歳で先生など無理です」

「そうよネギったらただでさえチビでボケで・・・」

確かにどう足掻いても年齢的にアウトだが、修行は修行だし麻帆良ならなんとかなるだろうというか何とかなってしまうと思いつつ

「ああ、ネギも日本で先生をすることだったんだ。私も日本で先生をするのが修行内容みたいだ・・・もしかしたら一緒の場所で修行するのかもしれないね」

と俺が発言するとネカネさんとアーニャが若干だが大人しくなった。

前述にもある通り、俺は覚えもないのに何故か家事全般ができるので若干安心したのだろう。

まぁ中身が『子供におじさんと呼ばれる年齢（ハタチ過ぎ）＋α』の年齢なのだからできないこともない。

ただし年齢相応の身長・身体能力なので、稀にできないこともあるが。例えば、身長が足りなくて洗濯物が干せなかったりすることとかだ。

魔法を使えば出来ることではあるだろうが、修行先では魔法を秘匿して生活しなくてはならないので自身の身体のみで臨む必要性があるだろう。

そんなこともあるがある程度は家事ができるし歳の割に落ち着いているので、ネカネさんやアーニャからは特に心配されることもない。

実際は、あまりにも落ち着きすぎていて心配されているかもしれないが、肉体年齢に精神が引っ張られているかのごとく稀にわがままを言ってしまうこともあった。

しかしながら、落ち着いているとは言えども肉体年齢は9歳であることには変わりはないので尚も校長に無理だと主張を続ける2人が

居た。

「卒業証書にそうかいてあるのなら決まったことじゃ。『立派な魔法使い』になるためにはがんばって修行してくるしかないのう」

ネカネさんとアーニャの直訴も虚しく、校長からその言葉が出るとネカネさんが立ちくらみを起こして倒れてしまった。

そして

「安心せい、修行先の学園長はワシの友人じゃからの。ま、がんばりなさい」

と言う言葉が続いた。

その言葉に元気に「ハイ！わかりました！」返事をするネギと唖然として立っているだけのアーニャ、そして倒れたネカネさん。

そんな光景が俺の目の前に広がっていた。

ネカネさんも大変だなぁ・・・等と思いつつもネカネさんを介抱する俺であった。

そして卒業から数ヶ月間ネギと共に日本へ行くための準備、日本語の勉強をしていた。

今は『転生者』である俺が日本語をネギに教える立場ではあるが、実は魔法学校での成績はネギの方が上である。

と言うのも、座学の成績は兄弟ともにトントンなのであるが、実技の成績は俺がネギの得意（光・風・雷）とする属性の魔法を使っていたため、ネギ

が主席で俺が次席という扱いになっている。

俺の得意属性は闇・氷・水とネギとは正反対でエヴァンジェリンとほぼ一緒の得意属性なのであるが、わざと成績を下げるためにネギの得意属性の魔法を用いてテストに臨んでいた。

これは今後の布石である。

俺は『転生者』であり、本来ならば『物語』には存在しない。

しかしながら、『物語』に『転生者』がいるのであれば何らかの副作用と修正力が働く可能性が考えられる。

そこで、弟の成績優秀さを俺より上に置くことでM奴等M元老院や学園長(ぬらりひよん)の目をネギに注目させることにしたのである。

ある種の生贄ではあるが『物語』とほぼ変わらないようにする為なのだから許せ・・・ネギ・・・と思っていたりもする。

が、結局主席・次席なので優秀な英雄(手駒)の息子達として目をつけられているかもしれないが・・・

因みに兄弟仲は良好である。

ネギの千(父)の呪文の魔法使いに対する思い入れは確かに歪んでいるように思えるが、年齢や環境から考察すると致し方ないものであると捉えることができる。

幼き頃から両親が目に見える範囲でおらずに伯（叔）父・伯（叔）母に預けられて生活していれば尚のこと、離れで子供二人で暮らし

ているということもかなり影響しているだろう。

そして母代わりに従姉のネカネさんがついていてくれたが、父に代わって叱ってくれる男の人がいなかった上に、村の人たちがネギに父の面影を見て叱らなかったことも影響しているであろう。

総じて、幼年期の子の精神を形成するのは周囲の環境であり、大人たちの態度であることからネギの歪みはネギだけの責任ではないと言える。

あまりの歪みっぷりに嫌悪感を抱く人間もいるかもしれないが、年齢や環境を考慮すれば自ずと受け入れることはできるのではないだろうか？

等とは言ってみるが、特に気にすることがなく会話して父親がどうこうという会話をして『俺』がいるということを認識させてやるだけでいいのだから。

まぁ、要するに親含めて大人が悪いんですよ。いくら愛していても、その思いが子に届いていなければ無意味なんだ。

そんなこんなでネギとは普通に兄弟をしていると思っている。

そういえば、ネギはやけに父にご執心だが母について気にしていないのは何故だろう？

先ほどの考察の如く、ネカネさんが親身になって面倒を見てくれていたからであろうか？

そのあたりは追々考えて行くことにしよう。

それとはまた別の要因として、俺が千の呪文の魔法使いになりたいと公言していることも上げられる。

俺自身は『立派な魔法使い』になりたいと思っていないが、このように公言することで周囲の人間に誤認識させている・・・つもりである。

これのお陰で、ネギも俺が千の呪文の魔法使いのような立派な魔法使いになりたいものだと認識してくれているようでやりやすい。

そんなわけで、特にコレといった問題も発生せずに兄弟仲良く卒業することが出来たのである。

気がつくと、ネギに出していた日本語の読み書きプリントが終わっていたので、今日の勉強を終えて部屋に戻ることにした。

・・・さて、次は日本での目標を考えよう。

麻帆良到着後のイベントを大きくわけると

1. 学年末テスト
2. 桜通りの吸血鬼
3. 修学旅行
4. 悪魔襲来
5. 学園祭
6. 魔法世界

この6つとなる。

とりわけ原作ブレイクをする気は無いが、要所要所、特にエヴァンジェリン一家や大河内さんが関わる部分では積極的に介入するだろ

う。

俺は大河内さん、茶々丸、エヴァンジェリンがすきなんだよ・・・

ハーレムにする気はないけど、好きな人くらい守りたいじゃないか・・・

まぁ、俺自身が『転生者』なので、既に『介入』しているのは否めないわけだが・・・

方針は基本ネギ任せで俺の知っている『物語』から離れすぎないようにフォローしていくことする。

好きな人らが巻き込まれるタイプの人なので、もしかしたら俺が主役の世界になるかもしれない。

その時は、ネギと一緒に俺も成長していけばいいかと考えている。

今想像してもわからないのならば、前を見て先に進めばいいから。

そう結論付けて、俺は明日に備えて眠りに落ちた。

そして翌日、俺とネギはアーニャとネカネさんに見送られてウェールズをあとにした。

懐かしき極東の地、日本にある麻帆良へと旅立ったのである。

一読戴き、気に入っていただければ幸いです。
感想・アドバイスありましたら是非。
誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただけると嬉しいです。
５０００字～１００００字を目安に作成していきたいと思います。
※Ｒ－１５　ガールズラブ　残酷な描写タグについては自身の物差と他の方の物差の差を考えて保険としてつけています。

設定小話１主人公の名前の由来・・・
ネギはナギの母音を変えただけだったので、アリカの母音を変えて名前をつけようとしましたが、アルカとかアリクとかアリスとか残念だったり女の子のような名前ばかり出てきてしまったので、取りあえず『ア』をつけようと思ったら、アルクという名前になりました。
『ア』をつける→アルクだ！という思考回路は意味不明なところがありますが、決まったんだしいいかな・・・と。
こんな感じです。

今後幾話かはこんな設定小話なども掲載していく予定ですのでお付き合いいただければ嬉しいです。

前作に引き続き読んでくださった方、ありがとうございます。
初めて読んでいただいた方、初めまして。
これからも、このカキモノにお付き合いいただければ嬉しいです。

2歩目～日本・麻帆良学園都市・麻帆良学園本校女子中等部を歩く～（前書き）

大幅修正2歩目です。
前2歩目は日本到着～歓迎会終了でしたが、
現2歩目は麻帆良行き車両内～学園長室退室までです。

2歩目～日本・麻帆良学園都市・麻帆良学園本校女子中等部を歩く～

早朝に日本に到着し、電車で麻帆良学園都市中央駅を目差す。

何度か乗り継ぎ、埼京線の電車に乗った辺りから学生達の登校時間と重なったらしく、電車にはどんどん学生が乗り込んできた。

そうこうしているうちに、満員になりギュウギュウと押しつぶされる俺とネギの姿がそこにはあった。

「ネギ、そっちは大丈夫かい？」

「うん、だ、大丈夫だよアルク・・・」

俺は『現実』での経験から平然としていたが、生まれてから今までウェールズで育ったネギにはキツそうである。

「本当に大丈夫かい？ほら、隙間作ったからこっちにおいで。」

本来ならば女性にしてあげることなのだが、ネギがあまりにも不憫なので隙間を作って入れてやった。

気がつくと、車両の中が俺達兄弟を除いて少女達ばかりになっていた。

曲がりなりにも俺達は日本人から見ると外国人にあたるので、どうにも好奇の目を向けられてしまう。

「僕達どこ行くの？ここから先は中学高校だよ？」

少女達は小学生程の身長しかない俺達がどこに行くのか気になる様子でそんな事をたずねて来た。

「いえ、その・・・ハ、ハックシュン！」

ネギがくしゃみをすると同時につむじ風が巻き起こり、スカートがめくれる。

それと同時に『次は～麻帆良学園～麻帆良学園中央で～ございます』日本の電車特有の鼻声アナウンスが流れる。

このアナウンスを聞くと、嗚呼、日本に帰ってきたな・・・と思えてしまうのは気のせいだろうか？

しかし、魔法学校時代から魔力の制御について直せと言ってはいるのだが、どうにも直してくれないのは何故だろうか？

電車を降りて、改札から出ると電車内以上に学生の山が見えた。

「わわわ・・・何コレ！？スゴイ人！これが日本の・・・」

「ここは日本の学校の中でも特殊だからね？日本の他の学校も毎朝こんな事になることはない・・・みたいだよ？」

ネギが勘違いしそうだったので訂正しておくが、理解してくれただろうか？

「あ！アルク、僕達も遅刻する時間だよ！？初日から遅れたらまずいし、早く行こう！」

その瞬間、高校生顔負けの速度で走りだすネギの背を目に、あの日を思い出しながら追いかけた。

ただし、俺は身体強化の魔法を使っていないのでネギのようなスピードで走ることはできないし、する気もないのであるが。

ちなみに、ネギはリュックを背負っているが『物語』のようにガチャガチャ音がなるようなものは入れさせていない。

父の形見である杖だけはどうしても譲ってもらえずに此方が折れた。

他の荷物については友人であるタカミチ宅に届くように既に配送済みなので、後日取りに行くだけである。

やっとネギに追いつくと、赤い髪をツインテールにした少女『神楽坂明日菜』にアイアンクローをされていて、その傍らには長い艶やかな黒髪の少女『近衛木乃香』が立っていた。

「ここは麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子校エリア初等部は前の駅やよ？」

「そう、つまり子供（ガキ）は入ってきちゃいけないの、わかった？」

「は、放してください～～～」

このか、アスナ、ネギである。

どうやら俺のことには気がついていないようなのでこちらから声を掛けることにした。

「弟が何かしましたでしょうか？したようでしたら私も謝りますので一度弟を放してはくれませんか、御姐さん。」

「あ、アルク！助けて！」

「え？うわ、子供(こども)がもう1人増えてる・・・」

「僕達どないしたん？もしかしてここに何か用事でもあるん？」

「ええ、私とそちらの弟なんですが、本日よりこの学校の英語科教師として赴任してきたアルク・スプリングフィールドと、そちらの御姐さんが頭を掴んでいるのがネギ・スプリングフィールドと申しまして・・・「え・・・ええー！！！！？」・・・コホン、学園長室に行きたいのですがどのように行けばいいのでしょうか？」

このかの質問に答えたら、アスナに途中で遮られたが驚くのも無理はないので気にしないことにする。

「ほえー？じゃあ君と今アスナが掴んでるネギ君がうちが迎えに行く予定やった新任教師さんなんやなー」

「そうだよーこのか君。」

このかの言葉に答えた声の方を見ると俺達兄弟の友達であるタカミチが来ていた。

「お、おはようございます！高畑先生！！」

タカミチに挨拶をすると同時にアイアンクローを外してネギが落ち

た。意識が落ちた訳ではない。

「久しぶりタカミチー！」

「久しぶりですね、タカミチ・・・いや、高畑先生と言った方がいいでしょうか？」

「・・・！？し、知り合い・・・！？」

「ええ、高畑先生が父の後輩だったらしく、その繋がりでお世話になりまして・・・年齢は離れていますけど友人としてもお世話になっていますよ。ハハハ・・・」

「そ、そうなのね・・・ってそんな事より！先生ってどーいうこと！？あんたらみたいなガキンチョがー！！」

アスナにガキンチョ扱いされた俺は若干凹んだ。

「いや、その2人とも頭はいいんだ、安心したまえ。それと今日から僕に代わって君達２－Ａの担任・担任補佐になってくれるそうだよ」

「そ、そんなぁ・・・そっちの子はまだしも、こんな子イヤです。さっきだって・・・いきなり失恋・・・じゃなくて失礼な言葉を私に・・・」

「いや、でも本当なんですよ」

「本当言うなー！大体あたしはガキがキライなのよ！あんたみたいに無神経でチビでマメでミジンコで・・・」

そこまでアスナが言うと、ネギが盛大にくしゃみをしてアスナの制服を吹き飛ばした。

俺はそっと自分の着ていたコートを羽織らせたのであった。

ちなみにアスナは『物語』の通りクマぱんを穿いていた。

このかにアスナが着れるものを持って来てもらい、アスナが着替えている間にアスナに何を言ったのかネギに聞いてみると

「あの人失恋の相が出てたから教えてあげたんだけど・・・そしたら何故か怒ってあんなことされたんだよ。」

これまた『物語』通りではあるが、やはり育った環境が悪かったのであろう、これから俺が正しい方向へと導いてやらないと不味いな・・・

「女の人には優しくしなさいってネカネ姉さんに言われただろう？ネギは親切にしたつもりかもしれないけど、女性にとって恋愛に関しての悪い結果を教えるのは失礼なことだから次からは気をつけようね？」

「そうなんだ・・・わかったよアルク・・・」

こういった事なら素直に言うことを聞いてくれるのだが

「それと、魔力の制御はまだできてないのかな？あれも直したほう

がいいと思うんだけど・・・」

「む・・・わかったわかった、それもやっておくから・・・」

魔法関係の話をするとどうにも聞き分けが悪い。

「ところで高畑先生、僕達の送った荷物は届いてますか？」

「ああ、ちゃんと届いているよ。後で持っていこうか？」

「そうですね、高畑先生の都合が良ければお願いしたいですね。」

「ハハハ・・・アルク君、タカミチって呼んでくれてもいいんだけどね・・・」

「一応先生をやるんですし、早めに慣れておいた方がいいんですよこういうのは。・・・そうだネギ、これからはタカミチを見かけても先生をつけて呼ぶんだよ？間違っても生徒達の前、特に学校内では呼び捨てにしちゃだめだよ。」

「うん、次から気をつけるよアルク。」

そこへ着替えたアスナとこのかが戻って来たのでタカミチと別れて学園長室へと向かった。

学園長室に入るとぬらりひょん（学園長）がいた。

『現実』で『物語』を読んでいた時はあまり気にすることも無かったが、実際に目の当たりにすると『ぬらりひょん』と言う言葉が非常にしっくりくる。

アスナはアスナですぐさま困った顔で『ぬらりひょん』を問いただしていた。

「学園長先生！一体どういうことなんですか！？」

「まぁまぁ、アスナちゃんや・・・なるほど、修行のために日本で学校の先生を・・・そりゃまた大変な課題をもろうたのー」

「は、はい、よろしくお願いします」

今現在、『ぬらりひょん』への対応はネギに任せている。

ここで、ネギに対応を任せているのは『物語』の通りに進行させたいからである。

ただ、アスナをスルーした上、修行の話をするとは何事かと・・・まぁ修行の話だけでは魔法に辿り付くなんてことはないであろうから問題はなさそうではあるが。

「しかし、まずは教育実習とゆーことになるかのう？今日から3月までじゃが・・・もちろんネギ君とアルク君の2人ともじゃよ？」

俺もネギも教育実習をする為の日本のカリキュラムは準備期間に受けておいたので抜かりは無い。

「ところでネギ君かアルク君には彼女おるのか？どーじゃな？うちの孫娘(このか)なぞ」

「ややわじいちゃん」

「ちょ、ちょっと待ってくださいってば！だ、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！しかもうちの担任だなんて・・・」

確かに日本では、子供が先生をするなどといったことは無いに等しいであろう。

「アスナさん・・・でしたっけ？一応私も弟もオックスフォード大学を卒業していますし、日本で教育実習をする為の単位も取得していますので出来ないということは無いかと思います。労働基準法でしたっけ？それについては調べていないので詳しくはわかりませんけど。」

これは準備期間中に言われたことなのであるが、俺もネギもアーニャもオックスフォード大学を卒業したことになっている。

推測するにこの世界では、メルディアナ魔法学校はオックスフォード大学の隠されたカレッジでありメルディアナ魔法学校を卒業した生徒全員が表(旧)の世界で有名であるオックスフォードの名前を使い、裏(魔法)の世界であればメルディアナの名前を使うのであろう。

もちろん、オックスフォード大学の卒業証書も貰っている。

あくまで推論であってもしかしたら、貰った卒業証書は偽造の可能性も残っているのだが・・・

考えて見ると、偽造の可能性のほうが高いような気がしてきたぞ・・・？

経歴詐称なんかで捕まったりしたくないのだが・・・

・・・そういえばここは麻帆良であることを忘れていた。

アスナがネギや俺のような子供が先生をするのはおかしいと思っているのは、麻帆良の認識阻害結界を『魔法無効化能力(マジックキャンセル)』で無効化しているからではないだろうか。

「・・・君・・・アルク君？聞いとるかの？アルク君や～？」

どうやら呼ばれていたらしい。卒業式の日にも言われたのにこの癖だけは直らない・・・まぁ話の最中に考え事をしなければいいのであるが、気になるとどうしても考えてしまうんだ。

俺がこんな状況になるとネギはいつもの通りにあわあわした様子でこちらを見るのだが、このかとアスナはそんな俺の悪癖など知らず不思議そうな顔をしていた。

「申し訳ないぬら・・・学園長。もう一度伺ってもよろしいでしょうか？」

思わずぬらりひょんと言いかけてしまった・・・今度から気をつけよう。

しかし、どう見てもぬらりひょんにしか見えなくなって困るんだが・・・ぬらりひょん見たことないのに。

『ぬらりひょん』のニュアンスと学園長の雰囲気でそんな気になってしまうのだから仕方がない。

「う、うむ・・・ネギ君にも言ったが、アルク君・・・この修行は

おそらく大変じゃ。ダメだったら故郷に帰らねばならんし二度とチャンスもないがその覚悟はあるかの？」

若干戸惑い気味に覚悟を訊ねられたが、元気良く返事をしておくことにする。

「はい、やらせて戴きます！」

「・・・うむわかった！では今日から早速やってもらおうかの？指導教員のしずな先生を紹介しよう・・・しずな君」

「はい」

呼ばれた女性教員の胸の谷間に顔を埋めるネギがいた。

「あら、ごめんなさい。よろしくねネギ君、アルク君」

「あ、はい・・・」

「よろしくお願いします、しずな先生。あとネギはさっさと退きなさい。失礼ですよ？」

「う、うん。ごめんなさいしずな先生。」

やはり、こういった事に関しては聞き入れてくれる・・・魔法関係についてはどうすればよいのだろうか。

「わからないことがあったら彼女に聞くといい。そうそう、もう一つ・・・このか、アスナちゃんしばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？アルク君は放課後にまたここに着とくれ。そ

の時に話すからの・・・」

そんな『ぬらりひょん』の言葉に

「げ」

「え”・・・」

「ええよ」

「ええ、わかりました。学園長。」

上からアスナ、ネギ、このか、俺の順で答えた。

「もうっそんな何から何まで学園長ーっ！」

「かわえーよこの子」

「ガキはキライなんだってば！」

「仲良くしなさい」

学園長のその一言で場は治まり、俺たちが担当する２－Ａの教室へと向かうことになったのである。

ちなみに俺が担任で、ネギが担任補佐をすることになっている。

この采配は魔法学校の成績から鑑みて、魔法使いとして優秀になるであろうネギに魔法使いとしての修行の時間が多く取れるようにするための手段の一つであると考えられる。

こうなる事を予想して、ネギの得意属性魔法を実技で用いて評価を下げておいたのである。

英雄信仰の蔓延る魔法世界の膝元のようなものである魔法学校では回復呪文についても授業はしていたが、派手な攻撃魔法を教えたがる先生や、知りたがる生徒が多かった。

こういった武断主義的な人物が多い中で実技のテストをすればどういった結果になるであろうか？

答えはネギのような制御が多少甘くても、派手で威力も高い魔法を使える生徒ほど評価が高くなるのである。

では、得意属性でもない魔法を使っていた俺はどうなるかというと、他の生徒に比べれば遥かに高い水準の魔法を行使することができるが、ネギと同じ魔法で制御もそれほど出来ていないし威力も低いのでネギの次の成績になるのである。

魔法学校の先生の目は節穴か？と言う人もいるかもしれないが、どう考えても節穴である。

むしろ、これほど節穴でなければ俺の使った魔法が得意属性ではないことに気付かれてしまっていたかもしれない。

そのおかげで、この結果を得られたのは上々であろう。

「ねぇ・・・アルク？僕のほうが成績いいのに、どうして担任補佐なのかな？」

「ネギと私の座学は同じくらいだったろう？それでいて実技はネギの方が優秀だった、それなら実技の練習も多く取れるように仕事の少ない役割をくれたのかもしれないよ？」

「そうなんだ・・・そうしたら、アルクはあんまりまｈ・・・練習できないってことなの？」

「そうかもしれないね。」

そう返してやると、何故か嬉しそうにしていた。

大方、『立派な魔法使い』に早く近づける等と考えているのであろうが、それは定かではなかった。

ちなみに、この会話を聞いたアスナとこのかはネギの方が成績が優秀であるということに驚いていたため、ネギが言い出しかけたまｈ・・・という言葉には気づいていそうになかったのである。

『物語』とは多少異なった流れになってはいるが『転生者』の俺がいることだし許容範囲であろう、そう考えながらネギの後ろを歩いていった。

2歩目～日本・麻帆良学園都市・麻帆良学園本校女子中等部を歩く～（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
1歩目のように書けているか不安です。
会話についてもコピペが多すぎるので、ネギのいない時のオリジナルストーリー時になんとか出来ればいいかな？と思っています。

設定小話2タイトルの由来
最初は『英雄の息子達』～双子の兄でもネギじゃない～というタイトルでしたが、主人公の名前がアルクになったことと、転生した主人公が『魔法先生ネギま！』のストーリー（ストーリー）の流れに沿いながら、話を進めて行くことから、道を歩く（進める）と言う意味合いを掛けて『双子の兄が歩く道～ネギま！～』というタイトルにしました。
要するにギャグです。
寒い・・・

感想・アドバイスありましたら是非。
誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただけると嬉しいです。

３歩目～麻帆良学園本校女子中等部２－Ａを歩く～　（前書き）

前作２歩目終了まで。
２－Ａ初授業から歓迎会終了まで。
一読でもしていただければ嬉しいです。

3歩目～麻帆良学園本校女子中等部２－Ａを歩く～

俺の隣にはこのかとしずな先生、先を歩くのはアスナとネギだが２人ともムスッとしている。

どうやらアスナは、先ほどの失恋のことやタカミチに代わって担任・・・といっても補佐なのだが、それをされるのが気に食わさそうな様子だ。

それに対してネギは女性に対してしてはいけないことであったと理解はしても、怒られたことに納得がいかないようである。

「あんたなんかと一緒に暮らすなんてお断りよ！！じゃあ私先行きますから先生！！」

アスナは突然怒鳴ってこのかと一緒に教室へ向かったようである。

「何ですかあの人は～？」

「ウフフ・・・あの子はいつも元気だからね、でもいい子よ・・・それと、ハイ、コレクラス名簿よアルク君。授業の方は大丈夫かしら？」

「ええ、一応高畑先生から事前にどの辺りまでやっているか伺ってますし、授業計画も高畑先生が作ったものを引き継いでやらせていただこうかと。」

確かにアスナの元気のよさは声とか動きとかでわかるけど、言葉遣いとか訂正しなくていいのかな？なんて思いながら、抜かりなく準

備しておいたことを告げておく。

本来なら、事前準備期間に少し早めに着て顔合わせであったり、授業計画の引継ぎであったりをするべきなのであろうが、ほぼ『物語』通りに動きたいのでこれで良しとしておくことにする。

まぁ、準備期間中に引継ぎが出来るように授業計画などもパソコンを使ってデータを貰ったりしたが・・・これって本当は駄目なことだけど。

「あ・・・う・・・ちょ、ちょっと緊張してきました。」

「ほら、ここがあなた達のクラスよ」

どうやら2－Aの教室に辿りついていたらしい。

「早くみんなの顔と名前を覚えられるといいわね？」

「あうっ・・・」

どうやらネギは自信がなさそうであるので

「ああネギ、私は今クラス名簿を見て大体覚えたから、これはネギが持ってるといいよ。」

クラス名簿を渡すと、幾許かそれを眺めて何かを考える素振りを見せたと思いきや急に顔を上げて、扉をノックして教室に入っていった。

不味いと思っても既に遅く、黒板消しトラップが目の前でふわりと

浮いてしまったが、即座に身体強化の魔法を掛けて黒板消しを思いっきり叩き落とした。

本当は弾くつもりだったのだが、いかんせん急なことだったのでついやってしまった。

「ゴホッゴホッ・・・ひ、酷いよアルク～・・・」

「ごめんごめん、ほらこのハンカチで顔ふいて・・・私が先に入るから、少し待ってなさい。しずな先生もそこにいてくださいね？」

第一印象が最悪になりそうだが、やってしまったものは仕方がないのと、ネギが一瞬黒板消しを浮かしてしまった教室内のざわつきを別の事柄に意識をずらすことで忘れさせようという魂胆である。

なので足元を良く見て、ロープを思い切り蹴り飛ばしてやると、今度は目の前に水の入ったバケツが落ちてきて、その先にさらに吸盤の着いた矢が飛んできた。

「・・・はい、まずは自己紹介を・・・と思いましたけど・・・これを仕掛けた人は正直に手を上げてくださいね。」

笑顔を浮かべながら生徒達を見回して言いのけたのだが、起こった出来事が予想とは違っていたのか、それとも俺に驚いているのかよくわからない表情で口をぽかんと開けていた。

「ああ、それともう大丈夫みたいなので後ろから回って入ってきてください、ネギ先生、しずな先生。あと、掃除用具は何処にありますか？誰か持ってきてください。」

「えーっ子供！？」

「てっきり新任の先生かと思って」

どうやら俺の様な子供が指示を出していることは無視するようだ。

しかし、『長谷川千雨』は周囲の状況に青筋を額に浮かべながらモップを持ってきてくれたようである。

「ありがとうございます・・・長谷川さんですね？よろしく」

「お、おう・・・？」

取り敢えず水浸しになった床を掃除しながら

「ああ、しずな先生、これは私が片付けておきますから取り敢えず全員席につかせて、先にネギ先生に自己紹介させてください。」

と言っておいた。

ちなみに千雨はもう一本モップを持ってきていたので手伝ってくれた。

それを聞いてしずな先生は手をパンパンと叩いて生徒達を座らせている間に片づけを済ませた。

千雨が席に着くのを確認したしずな先生はネギに自己紹介を促した。

「ええと・・・あ・・・あの・・・ボク・・・ボク・・・今日からこの学校でまほ・・・英語を教えることになりましたネギ・スプリ

ングフィールドです。3学期の間だけですけどよろしくお願いします。」

「それと、私がアルク・スプリングフィールドです。ネギ先生と一緒に英語を教えることになっていて、3学期の期間は教育実習ということなので、よろしくお願いしますね。」

・・・？反応が無い？と思ったがかなりタメの時間が必要だったらしく

「「「キャアッァー！かわいいい～～～～～～～～～」」」

とクラスの殆どの人間がネギに向かって走り出した。

俺の方には落ち着いてそれを見守るタイプの人が来たので、それはそれでよかったが・・・やはり俺は可愛げがないのであろうか？まぁ中身は彼女らよりも年上ではあるので仕方がないことではあるが。

その間、ネギが揉みくちゃにされて質問されていたので

「ハイハイ、落ち着いて。質問ならちゃんと受けますから一旦席に戻ってください。」

と言うと、渋々ながら席に戻っていった。

一応教師として赴任してきたわけだし、俺が厳しくしておいて『物語』のように甘い部分はネギに任せれば丁度いい役割分担になるだろう。

「さて時間も押していますし、誰かまとめて質問してくれる人はい

ますか？質問してくれる人は挙手をして、最大5点程でお願いしますね。」

挙手をしたのは『朝倉和美』だったので指名することにする、と言っても朝倉がメモでまとめて新聞にでもしようという魂胆を付狙っただけであるが。

「出席番号2番朝倉和美だよ！よろしく～。それで質問なんだけど、2人の年齢と間柄、出身地に学歴・・・それからウチのクラスで彼女にするなら誰がいいか教えて欲しいかな？」

これも予想済みなので、先の4点には俺が答えておく。

「私とネギ先生は双子の兄弟です」

と答えると教室がざわついたが、初めて俺達を見た人はこう言ったら大抵がこんな反応をする。

「2人共9歳でイギリスのウェールズ出身、そしてオックスフォード大学を卒業していますね。・・・最後の質問については・・・ネギはどう思う？」

生徒達の大多数に今のところ人気がありそうなのはネギなので、ネギのキレイな答えに期待しておく。

「えっと・・・うーん・・・そうですね・・・皆さんお綺麗ですよ」

そう言って笑顔を振りまく。

天然ジゴロとはこのことを言うのだろうか、また黄色い声が上がっ

ているので、手を叩いて静かにさせる。

「と、いうことですので。質問は以上で締め切りますがいいですか？朝倉さん。」

「もう少し・・・いや、大丈夫かな？ありがとうございます」

もう少しと言った瞬間笑顔を顔に貼り付けてみたら、何かを悟ったのか引き下がってくれた。

「他に質問があれば、授業後でも放課後でも私かネギ先生を捕まえてくれれば答えますから、それでいいですか？ネギ先生」

「う、うん・・・それで大丈夫だよ・・・アルク。」

なんとも頼りないが、この歳で教師として働くには経験が足りないし無理も無いであろう。

これからゆっくりと慣れさせればいいだけである。

「それじゃあ授業を始めますか、基本的に進行はネギ先生がするので、わからないことや質問があれば無言で挙手してください。私が行きますので・・・」

そして授業開始直後、黒板の上の部分に授業内容を書こうと背伸びして生まれたての小鹿のようにプルプルしているネギがクスクス笑われたこと以外は問題なく授業を進めることができた。

教壇の前から後ろへ移動する際、誰かの視線を感じた気がするが・・・気のせいだろう。

ちなみに、先ほどイタズラを仕掛けたであろう鳴滝姉妹＋美空は名乗り出てこなかったので重点的に当てて懲らしめておいた。

授業を終えて廊下に出ると、丁度タカミチが様子を見にきたところであった。

「ネギ先生、アルク先生初授業はどうでしたか？」

「タカミチ・・・先生ボクちゃんと授業できたよ。」

「そうですね、黒板の上の方に手が届いてなくて笑われてたけど、それ以外は出来てたね。」

ネギをからかうのにタカミチに先ほどのことを教えてみると、ネギは頬を膨らましてむーっとしていた。

「ハハハ、ネギ先生の身長ならしかたないよ。アルク先生がやってもそうだっただろう？」

とネギをフォローするように俺に話を振ってくれる。

「そうだよネギ先生、私がやっても身長が同じくらいなんだから台か何かがないと、必然的に私もあんなふうになってたと思うよ。」

それ以外にも、クラスの雰囲気や授業風景はどんなものだったか等を少し話して俺達2人は次のクラスへ、タカミチは職員室へ戻っていった。

他のクラスでは２－Ａ程騒がしくならなかったが、やはり似たような質問はされた。

それでも授業開始をすれば大人しいものだったので、２－Ａは特殊なクラスだと思えた。

別クラスの授業も滞りなく終わり、ようやく放課後になった。

俺は学園長室へ行く必要があったので、ネギと別れて学園長室へと向かった。

学園長室の扉をノックすると『ぬらりひょん』から「入ってもいいよ」と声がかかったので入室した。

中には『ぬらりひょん』以外に1人の少女と1人の女s・・・2人の少女が立っていた。

『龍宮真名』と『桜咲刹那』である。

『ぬらりひょん』が言葉に出す前に、ああこの2人の部屋で生活しろと言うのだろうなと予測が立ってしまうのが悲しいところである。

では何故この2人が候補に上がるかを考えると、この2人以外に適任者が見当たらないのである。

前提条件として、ネギがこのかとアスナと同室になることに魔法先生たちの反感を買っていることが挙げられる。

それを踏まえた上で、エヴァに任せるかと言われれば呪いを解除す

るためにその日に血を吸われて死んでしまうかもしれないし、何より魔法先生方の自称『立派な魔法使い』を目指している方々の反感を買う。

かといって、ネギのようにこのかとアスナのような一般生徒と同室にしようものなら、魔法秘匿の関係上同じく反感を買う事になるだろう。

どちらの手法をとっても、火に油を注ぐようなものである。

そうなってくると、必然的に裏関係者であるこの2人と同室にしたほうがこれ以上の反感を抱かれることもなく、すんなりと話も通りそうである。

例え、前提条件がなかったとしても、ネギも俺も一般生徒と同室にしてしまえば、何らかの異議は唱えられるであろうことからこの2人が最有力候補となるのだ。

では何故、ネギがこの2人のところではなく俺なのかというのは、俺の知るところではない。

「さて、朝は2人がいなかったから紹介できなかったんじゃが、アルク君のクラスの生徒である龍宮真名君と桜咲刹那君じゃ。アルク君はこの2人のところに泊めてもらってはくれぬかの？」

「ええ、私は構わないですが、お二方はよろしいのですか？」

「ああ、私も刹那も大丈夫だよ。なあ、刹那？」

「・・・ええ、大丈夫です。問題ありません。」

「・・・それじゃあよろしくお願いしますね、龍宮さん、桜咲さん」

こうもすんなりとＯＫがもらえるとは思っていなかった。

龍宮は仕事として報酬を貰っていそうではあるのでわからなくもないが、刹那はどういうことなんだろうか？

もしかしたら、俺の容姿が原因か・・・？

それも後々わかるだろうから気にしないことにした。

「それじゃ、アルク君のことよろしく頼むぞい？２人共。」

「「はい」」

俺を心配して頼んでいるのか、暗に俺を押さえつけておけと言っているのかわからない、食えぬ『ぬらりひょん』である。

できれば前者であることを祈りつつ、２人と一緒に学園長室を退室すると龍宮が

「この後時間はあるかい？ウチのクラスでアルク先生とネギ先生の歓迎会をするみたいなんだが。ああ、勿論部屋にはそれが終わったら案内するが・・・参加しないと言うのであれば、今すぐ向かってもいいし、用事があるのなら付き合うよ・・・報酬はもらうけど。」

最後にボソっと言った言葉は聞こえてます龍宮さん・・・

この後には予定などは全く無かったので

「いえ、特に予定も入っていないので是非参加させていただきますよ。」

と了承の旨を伝えて２－Ａの教室へと向かうことになった。

教室に入るとクラッカーの音と共に「「「ようこそ、アルク先生ー ッ」」」と歓迎の言葉が貰えた。

今朝はあんな調子だったけれど、歓迎はされているようで少し安心した。

ネギはどうやら先に来ていたらしく、生徒に混ざってクラッカーを鳴らしていたようであった。

こういうのは実は苦手なので、隅のほうでゆっくりしようと思ったが真ん中に座っていたネギの隣に座らされた。

周囲を生徒達に囲まれて、逃げられなかったので会話半分周りを眺めているとネギの方に『宮崎のどか』がやってきた。

「危ない所を助けていただいて・・・その・・・あの・・・これはお礼です・・・図書券・・・」

どうやらネギは『物語』の通り、のどかを助けたようである。

そこに今度はあやかがやってきて、ネギの銅像を渡そうとしていたところにアスナがつっかかって喧嘩を始めていた。

丁度いいので俺は席を離れて教室の隅に向かい壁に背を預けて窓の外を眺める。

そして、教室内の喧騒を見ながら『超鈴音』と『四葉五月』が作ったという特製中華まんをほおばっていた。

・・・美味い、もう一個・・・少しニヘラと笑ってしまった。

そこへ麻帆良のパパラッチこと朝倉が若干頬を赤く染めてやってきた。

「ア、アルク君、今朝できなかった質問があるんだけど、質問してもいいかな？」

「何ですか朝倉さん？」

「今朝双子の兄弟って聞いたけど、似てないのはどうしてかなーって思って。」

俺とネギの容姿は全く違い、ネギはナギに似ているのに対して俺はアリカにそっくりなのだが、髪の色と目の色がどちらにも似つかない。

二卵性双生児と言えばわかるだろうか？似ている双子というのは一卵性双生児が多いのだが、容姿が異なったり、性別が違ったりする双子は二卵性双生児なのである。

本当に兄弟なのかと自身を疑ったこともあるが、２人揃って預けられたこと、アリカに似ていること、魔力の保有量からナギとアリカ

の子で間違いはないだろう、そう結論付けることにしたのであった。

「私たちは二卵性双生児でネギが父に私が母に似たようです。今朝みたいに双子だって言うと、私達2人を初めて見た人たちって大体驚かれるんですよね。」

「へぇ、そうなんだ。教えてくれてありがと、また何か質問があったら来るよ。」

朝倉は次のターゲットであろう、しずな先生とタカミチの方へと向かっていった。

今度は予想外の人物『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』と『絡繰茶々丸』がこちらへやってきた。

『物語』ではネギに接触した描写がなかったから、こちらにも来ないだろうと安易に考えていたが・・・それは間違いだったようだ。

俺は内心焦りながら身構えるのだが、エヴァの口から出た言葉に驚愕した。

「・・・フン、奴の息子だと聞いて期待していたが・・・どうやら期待外れだったようだな。そんな死んだ魚のような目をした貴様には担任なんて荷が重過ぎるだろう、ネギ・スプリングフィールドにでも担任を譲って故郷にでも帰ったらどうだ？」

「・・・あ、貴女は何故そんなことを・・・」

衝撃のあまり頭が回らずに、ようやく絞り出たような言葉を返すが

「目を見ればわかるんだよ、お前の目には力がない。まるで目的もなく生きているような人間の目だ。ネギ・スプリング(あっち)フィールドの方は貴様よりは骨がありそうだがな。」

その言葉に俺は何も言えなくなった。

「・・・何も言い返せないか・・・死にたくなかったら、早く故郷にでも帰れ。若しくはこの場で血を吸い殺してやってもいいがな・・・。」

言葉と共に後ろを向いて歩き出すエヴァはペコリと礼をしてその後ろに続く茶々丸と、この場を離れていった。

俺の頭はハンマーで殴られたような衝撃を受け、今もグラついている。

『目的もなく生きている』・・・そう、俺には目的がない・・・いや、目的が無いと自分に嘘をついていたのである。

ただ、ネギの行動を正して、最終的にはネギくらい強くなって、ずっと『ネギ(原作)が主役の物語』に縋り付いて生きていけば、何とかなると自分に思い込ませて。

『物語』から外れるのが怖くて、『現実(今)』を認めてしまうのが怖くて。

本当は『現実(今)』が現実(リアル)であることなんて解っていた。

しかし、それを俺が認めてしまえば『現実(前世)』は本当の『前世』になり、自称ではない本当の『転生者(イレギュラー)』になってしまう。

だから、『物語(夢)』だと思って『物語(原作)』を続けていけばいつかは戻れるなんて考えてしまっていた。

そしてあの日からずっと宙ぶらりんなまま今までを生きてきた。

『ネギの傍でただ見守り、一緒に行動するだけの兄』それが『自分の役割』だと思うことによって。

だけどそれも今日で終わりにしよう。

好きなヒトの言葉には大きな力がある。

守りたいヒト・・・にあんなことを言われてしまったのに、そのまま腐っているだなんて男が廃る。

『現実(前世)』に、『ネギ(原作)が主役の物語』に縋らずに、一歩前に出て『現実(今)』を始めよう。

俺の知る『物語(原作)』は『ネギの物語』、ならば『アルク・スプリングフィールドの物語』を始めよう。

俺の物語の目的はとうの昔に決まっている。

スタン爺さんを筆頭とした村人の石化の解呪だ。

ネギは石化の解呪に対する意識が薄い・・・それは俺のせいであり、だがその事実から逃れたいがため、今まで『物語(原作)』に縋りついてきた。

だからこそ、俺は石化の解呪をしなければならないのである。

きっとこんなことを考えているのをスタン爺さんに知られたら怒鳴られて拳骨をくらうだろう。

それでもいい、あの飲んだくれでも優しい爺さんの笑顔が見られるのならいくらでも勉強してやろう。

だが、この世界に石化の解呪をするための手掛かりは薄い。

ならば魔法世界はどうか？可能性はあるが、今の俺の実力ではあちらの世界では通用しない。

容姿の関係で何が起こるかもわからない。

だとすれば、それに対抗せし得る力を付けなくてはならない。

では今から『ネギの物語』のようにエヴァに弟子入りするか？否である。

先ほどあのような事を言われて直に弟子入りとは馬鹿げた話である。

それに俺の力は現時点でのネギ程度の力量はあるが、そこいらの魔法先生よりは圧倒的に経験が足りず、説得できるほどの材料もないのである。

そう、今は時期ではない。

俺が無力であるならば、期になるまで自らが出来る最大限の修練を重ねる他無いのである。

その時が来るまで、俺は牙を研ぎ待ちに徹しよう。

きっとそこが、俺にとっても、ネギにとっても転機になるはずだから。

もしかすると、考えが甘いかもしれないし、軽いのかもしれない。

それでも前に進もうと言った、守りたいヒトを守りたいとも。

だからきっと、これでいいのである。

気持ちも晴れて周囲を見ると、クラスの生徒の多くがこちらを見て顔を赤くしていた。

・・・考え事をしながら三文芝居のようなことでもしてしまったのであろうか？

注目されていることに気がつき顔に血が上り熱ってきた。

それと同時に何人かの生徒と顔を赤くしたネギとアスナが入ってきた。

どうかしたのだろうか・・・？と思ったが、どうやらネギとアスナのキスシーン（いたずら）が終わったところだったらしく、良い時間でもあるので解散することになった。

龍宮と刹那の2人と一緒に女子寮へと向かう途中

「何か良い事でもあったのかい？アルク先生。」

龍宮にそんなことを聞かれた。

歓迎会でのエヴァの言葉は俺にとってはプラスにもマイナスにもなる言葉だったが、プラスになってくれたと思う。

「ええ、まあ・・・多分、良い事だったんだと思います。ところで夕食はどうしますか？無いにしてもちょっと買いたい物があってスーパーに寄りたいのですが・・・」

買いたい物は餡蜜の材料だ。

「夕飯か私は食べるかな・・・刹那はどうする？」

「私も食べようかな・・・」

「それじゃあ、夕飯の材料と俺が欲しいものを買いに行きましょう。龍宮さん、桜咲さん。」

俺が何故か得意になった料理の腕で2人を唸らせよう。

そんな訳で、俺たちはスーパーへと向かったのである。

3歩目～麻帆良学園本校女子中等部２－Ａを歩く～　（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
１歩目のように書けているかまだ不安です。
話が急展開すぎるかもしれませんし。
あの日についてはネギと同じ時に書きたいなと思っています。
あとは文末がなんだか情けない感じか・・・？

設定小話３アルク転生前
アルクの転生前の個体は今も生きていて、普通に生活しています。
年齢は２０代ですが、考え方はまだ幼いです。
また、自分でやる分には強くてニューゲーム（２周目）は好きですが強いニューゲーム（最初から最強）はあまり好きじゃないタイプです。

感想・アドバイスありましたら是非。
誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただけると嬉しいです。

4歩目～麻帆良学園本校女子中等部を歩く～（前書き）

前作3歩目を大幅修正しました。
展開が全く別モノになっています。
少し短くなっています。
一読していただけると嬉しいです。

4歩目～麻帆良学園本校女子中等部を歩く～

麻帆良に来てからはや6日、授業をすることにも慣れ始め、その他業務にもようやく慣れ始めたところである。

龍宮と刹那と一緒に生活するのも慣れ始めたので、何故すんなりと俺を受け入れたのか刹那に聞いてみたら

「ええ・・・その・・・なんと言いますか・・・その白い髪と赤い瞳に親近感を・・・いえ・・・なんとなく・・・です・・・」

との答えが返ってきた。一応、先天性白皮病(アルビノ)じゃないんだけれどな・・・と思いつつも、刹那が白髪赤目の烏族のハーフであるのは知識であり、本人にもらすべきことではない。

「ああ、そうなんですね・・・ありがとうございます」

この答えが精一杯だった。

気まずくなったので、夕飯を少し豪華にして誤魔化してみたりしたのは内緒の話である。

また、ネギがこの6日間の中で魔法薬(ホレ)を作ったり、風呂に入っておらずにアスナに大浴場に連れられていたことを刹那と龍宮から聞いた。

流石に、教育実習をしている以上、四六時中ネギについてはおれず仕事をしてしまうのは日本人の性であると俺は思っている。

今は立派な？イギリス人であるけれども・・・

なので目が離れている隙に『原作』通りの行動をされることもあるが、いかんせん俺は万能ではないので出来ないことだってある。

ちなみに、ネギがホレ薬をアスナに飲まされてしまった日の深夜、ふと目が覚めると

「このちゃんが・・・このちゃんが・・・ネギ先生に取られてもうた・・・うう・・・このちゃん・・・守れなくてごめんな・・・ううう・・・」

といった、悲壮感溢れんばかりの刹那の寝言が聞こえてきたりもした。

そして昨日の話になるのだが、ネギがバカ五人衆（レンジャー）ことアスナ・『綾瀬夕映』・『佐々木まき絵』・『古菲』・『長瀬楓』の居残り授業をしたらしい。

居残り授業をするという『原作』知識はあったが、昨日も普通に仕事をして、帰宅していたのだ。

今朝、来たときにこの居残り授業があったことに唖然とした。

最後まで残ったであろうアスナがタカミチの言葉を聞いて逃げ出し、それを杖で追いかけたであろう。

昼休みになり、職員室でネギに昨日の話しを聞いてみる。

「・・・ネギ先生、どうして私も参加させなかったのですか？」

ネギが俺に居残り授業をすることを報告しなかった、これが一番の疑問だ。

報告・連絡・相談、社会人として当然のことらしいが、『前世』でも『現実』でも、出来ているかはわからないので強くは言えない。

「ボ、ボクも最初はアルクを呼ぼうと思ったんだけど・・・居残り授業対象者の教えてくれたしずな先生に『学園長がネギ君1人でやるように』言われたって・・・」

どうやら『ぬらりひょん』が原因らしい。

しかし、何故ネギのみでやらせようとしたのだろうか？

教育実習における生徒の見ていない作業は殆ど俺がやって、ネギには生徒の前で授業をさせるという手法を取っているのだが・・・

『前世』での教育活動は行ったことがなく、俺自身も初めての体験だったがこれを全て9歳の子供が出来るかと言えば微妙である。

社会に出たのだから～と言われれば、何も言えなくなるが・・・やってみれば『原作』で一般教諭にも多少甘く見てもらえていてもおかしくはない仕事量である。

兎に角、どうして1人で居残り授業をさせようとしたのか『ぬらりひょん』を問いたださなくてはならないと思い、俺は学園長室へと向かった。

「学園長、何故ネギ先生1人で居残り授業をさせたのですか？私と

ネギ先生の2人じゃないと現状1人では授業など出来ないと思うのですが？」

「うむ、それはそうなんじゃがの・・・？アルク君はちぃとばかし仕事のしすぎじゃないかね？一般の先生方から抗議されたんじゃよ。あまりにもネギ君の仕事量が少なすぎるとな。」

・・・？俺は中身がアレなので問題はないが、ネギに関してはまだ9歳だし問題ないのでは？と『ぬらりひょん』の答えに考えるが

「職員室での仕事は殆どアルク君がしとるじゃろ？その上ネギ君は先に帰ってしまい、初日から4日間残って仕事をしているのはアルク君じゃったと。同い年であるネギ君とアルク君の仕事量に差がありすぎたということじゃ。元々高畑君も2人にやってもらおうと考えていたそうなんじゃが、こう抗議をされてしまってはアルク君に任せるわけにはいかんと思ってのう・・・」

自身の肉体年齢について失念していたようだ。

確かに俺の中身はもうアレな年齢でそれなりに物事を考えられると思っていたが、やはりまだ甘いようである。

精神的な年齢だけで見れば、俺とネギは約２０年もの経験の差があるので比較対象にすらならないが、肉体年齢は俺もネギも一緒な上に双子であることから必然的に比べられてしまうのは道理である。

そういえば、魔法学校在学中もネギと俺は比較されていた気がするが・・・俺自身が俺は俺でネギはネギだと思っていたこともあり、全く気にしてなかったような気がしてきた。

「それにの、ネギ君にはもう少し箔をつけてもらわねばならんのじゃよ・・・」

「・・・それは、どういった意味合いでの事ですか・・・？」

「彼は『立派な魔法使い』を目指しておるんじゃろ？昨今の若いものが言っとる『立派な魔法使い（正義の）』ではなくのう・・・ならばこの老骨も手助けしたいと思うんじゃよ。」

『ぬらりひょん』は本心で言っているらしく、そう言うとふと俺から視線を逸らして窓の外を眺めた。

「魔法学校の成績を見ての、成績が優秀なネギ君を鍛える為に本来は担任をやってもらおうと思ったんじゃが、高畑君の意見はアルク君に担任をしてもらいネギ君には担任補佐をしてもらうということじゃったよ。」

どうやら、俺が担任になったのはタカミチの口ぞえがあったからしい。

「確かにネギ君は魔法使いとしては優秀じゃが、その実は歳相応の子供じゃ。アルク君がおる前でこう言うのも難じゃが、アルク君は歳の割りに大人びておるし、落ち着きもあると。一般の先生方を納得させるのであれば、ネギ君を担任にするよりはアルク君を担任にした方が後のゴタゴタも少なくなるだろうとな。」

正にその通りであるが、自分が大人びていると天狗になることは許されないことではある。

「事実、一般の先生方からは違った意味で抗議が来ておる分この判

断は正しかったんじゃろうな・・・しかしのう、ネギ君があまり仕事をしていないという事実は不味いんじゃよ。一般的にも、修行的にもじゃ。」

「・・・申し訳ありません・・・」

原因は自分にもあったようで、反省しなくてはならない。

今日はネギに少し仕事を割り振ってみよう・・・

「ではネギ先生にも、もう少し仕事を割り振って仕事の量がある程度均一になるようにしていきます。」

「うむ、それで頼むぞいアルク君。・・・わざわざ来てもらってすまんかったの・・・また何かあったら来るんじゃよ？わしも相談に乗るからの・・・」

案外、『ぬらりひょん』はネギの事を考えていてくれるんだなと俺は思えた。

今後は『ぬらりひょん』にネギの行動方針を任せても良いかもしれない。

『原作』から考えるといかんせん行動にダメな部分は残る・・・例えば、図書館島のゴーレムであったり、修学旅行の親書であったり・・・が。

ただし、図書館島での一般生徒を巻き込んだネギへの試練はどうにかしたい所ではあるが。

修学旅行の親書については、一般生徒さえ巻き込まなければ問題はないと考えている。

子供のお使い的な感じで親書を届けさせるのはいかがなことかと思わなくもないが、そこは『ぬらりひょん』の手腕・責任であり、俺から言えるとすればそれでいいのかと問いただすくらいのことしか出来ないだろう。

まあ、『ぬらりひょん』については見直したが、心内で学園長と呼ぶことはほとんどないであろう。

『ぬらりひょん』だし、何より俺がこの呼称を気に入っているので。

「わかりました・・・ありがとうございます学園長。失礼しました。」

少しだけ気分がよくなった気がした。

職員室に戻ると、ネギが若干落ち込んでいるような燃えているような複雑な表情をしていた。

「あれ、どうかしたのネギ？」

「アルク・・・実はさっきまき絵さん達が怪我したみたいで・・・怪我をさせた人のところまで行くと喧嘩してたんだ。それを止めようとしたけど上手くいかなくて、アスナさんやいいんちょさんが一度は助けてくれたけどまた喧嘩が始まっちゃって・・・そしたら、タカミチ・・・先生が代わりに止めてくれたんだ！」

『原作』の知識があるはずなのに、細かいイベントは殆ど忘れてし

まうのは仕方がないことにしたい・・・

そこへ丁度体育の先生がやってきた。

「子供先生たち次の時間授業ある？ちょっと出掛ける用事ができちゃってさ。次の時間の授業が無ければ２－Ａの体育の監督をお願いしたいんだけど・・・大丈夫かな？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

「それじゃ、頼むよ。あと新田先生には俺が報告しておくからさ。ああ、２－Ａの授業は屋上でバレーだからよろしくね。」

「はい、そういえば屋上のコートを使用するのは何クラスですか？」

「ん？ちょっと見てみるよ・・・うーん・・・２－Ａだけだけど、どうかしたかい？」

「いえ、大丈夫です。少し気になっただけですので・・・」

もしかすると・・・いや、確実に高等部２－Ｄのドッヂ部”黒百合”さんが来ているだろう。

どう追い払おうか考えながらネギと共に屋上へ向かおうとしたのだが、新田先生に呼び止められた。

「アルク先生、少しお話したいことがあるんですが？ああ、２－Ａの体育の件でしたらネギ先生だけで十分でしょうから、時間をいただけますかね。」

有無を言わさぬこの迫力、流石『鬼の新田』と言われるだけはある。

「ええ、構いません。それじゃ、ネギよろしく。」

「うん、わかったよアルク。失礼します新田先生！」

そして新田先生と話をしたのだが先ほど『ぬらりひょん』に言われた通り、ネギと俺の仕事量の差について直接注意されてしまった。

教育実習というのは、2～4週間を目安に行われるものである。

その短い期間の中で教員として必要な事を学ぶものなのではあるため、高々4日間だとしても、期間から考えるとほぼ1週間なのである。

今回は1ヶ月強の教育実習期間が設けられているものの、その中の1週間でこうも仕事量に差がついてしまうと、ネギが教師として必要な技能及び知識をつけるのを遅らせている状態になっていたのである。

それでは、実習期間が実習期間として成り立たなくなり、実習不十分となって一般的にも、魔法使いの修行としても良くない結果になってしまうのである。

もっとゆっくり慣れさせていけばいいと思っていたのだが、考えが甘かったようである。

『原作』知識として、ネギはしずな先生からなんとか合格点を貰って最終課題に臨んでいたのだが、今の状態ではどうなるかわからないだろう。

新田先生からこのように言われているのであれば、もしかするとしずな先生から合格点が貰えずに最終課題に臨めなくなり、俺の知らぬうちに『原作』から完全に乖離させることになっていたかもしれない。

それは俺の望むところではないので、今日からでもネギの仕事量を増やさなくてはならないだろう。

それ以外にも、ネギ程になれとは言わないが歳相応に生徒達と触れ合ったらどうだとか、もう少し新田先生を頼ってもいいんだよとか。色々と言われて、話が終わる頃には授業の終わりそうな頃合となっていた。

新田先生から解放されて、俺は屋上へと向かった。

屋上に出るドアの前にはタカミチとしずな先生がいたので、今頃ネギはクラスメイト達に胴上げされていることだろう。

俺はそっと職員室へと戻った。

紅茶を淹れて、冷めるのを待っているとネギが戻ってきた。

スーツ姿ではなく、体操服姿であるのがシュールである。

「お疲れ様、ネギ、今日は私の代わりに明日の授業計画を立ててくれないかな？ちょっと早めに帰らないといけない用事ができたから。」

「うん、わかった。やっておくから教えてくれる？」

やはり、こういう所は素直に聞いてくれるのでありがたい。

この調子で仕事をやって貰えばなんとかなるであろう、そう楽観しながら、今日の仕事を片付けていったのだった。

4歩目～麻帆良学園本校女子中等部を歩く～（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
何かに振り回されている気がしてきた・・・

設定小話4アルク転生前その2
実は彼はテンプレを体験しています。しかし3つの願いを用いてテンプレした記憶を消し、髪と瞳の色を決め、強力すぎる能力を除いたある人物の経験と能力を望んで転生しました。
なので自称転生者だったり、得意でもなかったことが得意になっています。

アドバイスがありましたら是非。
誤字脱字についてもありましたら教えていただけると嬉しいです。

5歩目～麻帆良学園・図書館島を歩・・・かない・前編～（前書き）

前作４歩目前半部分です。
書き直して見ると如何に詰め込みすぎたかがよくわかりました。
反省。

一読していただけると嬉しいです。

5歩目～麻帆良学園・図書館島を歩・・・かない・前編～

ネギに仕事を振り分けるようになってから数日、職員室の皆がネギの飲み込みの早さに驚いていた。

しかも仕事を片付けるスピードも9歳とは思えぬスピードで、現役教師も吃驚のようだ。

何せ、あの新田先生すらも驚いているくらいなのだから。

もちろん、俺も初日にネギ並みのスピードで仕事を片付けていたので驚かれてはいたのであるが。

先日は楽観していたが、この様子であればきっと大丈夫だと思う・・・思いたい。

何せ、たった数日で俺が思っていた以上に仕事をこなせるようになり、既に仕事が同程度に割り振られているという事実があるのだから。

この数日は新田先生や『ぬらりひょん』からのお話通り、俺の仕事量とネギの仕事量が同程度になるようにしているので、新田先生から呼び出されたり、『ぬらりひょん』に呼び出されたりすることもない。

そういえば、もうすぐ学年末試験1週間前なのだが2－Aは普段通りなのに対して、他のクラスはピリピリとした表情を持って授業に臨んでいる。

こんな状態だったのに『原作』のネギは気がついていなかったのかと思うと情けない限りである。

現に、俺の隣にいるネギも指導教員であるしずな先生から来週学年末試験があると教えられたはずなのにあまり気にしていないようだ。

しかし、『ぬらりひょん』は『原作』のように『期末試験で２－Ａを最下位から脱出させたら正式に先生にしてあげる』という最終課題を出してくるのであろうか？

それはもうすぐ解ることだろう。

「そういえばネギ、２－Ａって前のテストまでずっと全クラス最下位の平均点だったらしいけど知ってたかい？」

「え、そうなのアルク？ボクは知らなかったよ。どうしてだろうね？」

少しだけ２－Ａの成績について意識させておいたほうがいいかもしれない。

「んー・・・バカレンジャーだっけ？居残り組の生徒達、成績を見てみるとあの５人の平均点が著しく低いみたいだからそれが原因みたいだね・・・。」

「そうなんだ・・・でもアスナさんも最近は頑張ってるし、他の人たちも頑張ってるから大丈夫だと思うんだけど・・・？」

「ネギ、来週学年末試験なんだけど・・・２－Ａの雰囲気ってどうだったっけ？」

「え？いつもと変わらないけど・・・それがどうしたの？」

「他のクラスは？」

「・・・そういえばピリピリしてるかも。昨日今日は質問に来た生徒も他のクラスの人が多かったし・・・。」

「だろう？２－Ａの生徒で質問に来るといったら、大体宮崎さんくらいだし。これじゃあまた期末試験も最下位になるかもしれないね。」

「そうかな？でも、まだ試験までは日があるし、大丈夫じゃないかな？」

示唆してみたものの、のほほんとしているネギ。

これで最終課題が『原作』と同じであったら、慌てて

「今日のＨＲは大・勉強会にしたいと思います！次の期末テストはもう、すぐそこに迫ってきています！あのっ・・・そのっ・・・実はうちのクラスが最下位脱出できないと大変なことになるので～みなさん頑張って猛勉強していきましょ～！」

等と言ったりするのであろうか？

幸い、『原作』とは違って『俺』がいる上に俺が担任をしているのだから今からでもテスト勉強のやる気を出させておくのも手かもしれない。

それに、例えその日になってネギが慌てても俺がいるんだしそんな事も言えないだろう。

帰りのＳＨＲになり、

「みなさん、来週は学年末テストがあります。今学年最後のテストですし、普段よりも力を入れて取り組んでみてもいいかもしれませんね？」

と当たり障りなく言っておいた。

果たして効果は出るのであろうか。

先日の言葉に効果は見られず、２－Ａは相変わらずほのぼのとした空気で日々を過ごしているようである。

日直であろう、『椎名桜子』と『明石裕奈』が職員室までやってきたのでＨＲのため２－Ａへ向かう。

「・・・やっぱり他のクラスのみなさんはピリピリしてますね」

「そうだねネギ君。やっぱり学年末テストが近いからかもね。」

「来週の月曜からだよネギ君」

「うちもそうなのに・・・今の調子で大丈夫かな？」

「あー」

「あはは、うちの学校エスカレーター式だからあんまり関係ないんだ」

「特に２－Ａはずーっと学年最下位だけど、大丈夫大丈夫」

ネギ・桜子・裕奈の会話に口を挟む。

「今は関係ないかもしれませんけど、高校生になったら関係しますよ？高校の勉強は中学の勉強を基礎にした勉強ですから、今の成績が悪いと高校じゃ留年してしまうかも・・・？」

「んーそうかもしれないけどね？今が大丈夫だったらそれでいいっしょ？アルク君」

「明石さん、学校では先生と呼んでくださいね・・・」

「あ、ごめーん、アルク先生。」

まぁ、この答えは予想済である。

中学生で将来のことまで考えて行動できる人間は早々いないであろう。

全くいないわけではないのだが、多くはこのように答えるのではないだろうか。

「まぁ、そうなんですけどね。私は大学を受験する際少しばかり苦労したので・・・みなさんもやって置いた方がいいと思うんですけどね・・・」

『前世』での感想を率直に述べる。

こちらでも一応大学卒業扱いなので違和感はないだろう。

そこへしずな先生がやってきた。

「ネギ先生。あの・・・学園長先生がこれをあなたにって・・・」

ネギに手に持っている手紙を差し出した。

「え・・・何ですか深刻な顔をして・・・えっ!?ボクへの最終課題!?」

ネギが手紙を開くとそこに『ねぎ君へ　次の期末試験で、二ーAが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。　麻帆良学園学園長　近衛　近右衛門』と書かれた1枚の紙が入っていた。

『原作』通りの展開である。

どうしようかな・・・と思っているとふと、あることに気がつく。

ネギの名前だけで俺の名前が無いのだ。

「しずな先生・・・学園長先生は私には何か渡したり、伝えたりするようには言っていなかったですか?」

「アルク先生にもコレが・・・」

手渡された手紙にはネギと同じく一枚の紙が入っていたが、『あるく君へ　今日の授業が終わったら学園長室に来る様に。大事なお話

があるんじゃよ。　麻帆良学園学園長　近衛　近右衛門』と書かれていた。

ネギと違う・・・？どういうことなのだろうか？

すると思考が固まって身体も固まっていたネギが再起動した。

「な・・・なーんだ簡単そうじゃないですかーびっくりしたー」

「そ・・・そう？」

その言葉に先を歩いていたゆーなと桜子が戻ってきて、ネギの持っている紙を覗きこんだ。

「えー？なになに！？どーしたのネギ君？」

「あーネギ君本物の先生になるんだ！？」

「へーなになに・・・？」

「明石さん、椎名さんそういうモノは勝手に見ては駄目ですよ？」

「はーい・・・」

「あれ？ネギ君が本物の先生になるんだったらアルクく・・・先生はどうなの？」

「それは私もまだわからないんですよね。」

「そうなんだー？ま、ネギ君もアルク先生も頑張ってよね！」

「ああ、後この事は他の人たちには口外してはいけませんよ？あとネギ先生も生徒に見られないようにそういったモノは直にしまいましょうね？」

「「はーい」」

「うん、わかったよアルク・・・」

そして、２－Ａに向かった。

「みなさん、本日のＨＲは学年末テストも近いので勉強会にします。」

ネギが可愛そうなので、少しでも勉強させる機会を増やしておくことにする。

「アルク先生、素晴らしいご提案ですわ」

「はーい、提案提案！」

「何でしょう、椎名さん？」

「『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

「「「「おお～～～～っあはは、それだーっ！」」」」

「な、ちょ！？みなさん！？」

普段であれば却下するのだが、ネギがどのような反応をするか見てみたかったのでネギに振ってみる。

「どうしましょうか、ネギ先生？」

ネギは考える素振りを見せるとそれでいいのではないか？という答えが返ってきた。

その答えを聞いて英単語野球拳を始めようとした生徒達を制止する。時間の無駄ではあるが、ルールも聞かずにそんなことを始めたらどうなるかがネギに解るようにするために桜子にルールを聞くことにする。

「ふむ、では椎名さんルールを説明してください。私はルールがわからないので、どういったことをするかによっては許可しますよ？」

まぁ、中の人の年齢がアレなので野球拳がいかなるものかは知っている。

しかし、外見は9歳なので知っていなくてもおかしくは無い年齢なのである。

「ええと、英単語のスペルを見せてその意味が答えていくゲームで・・・答えられなかったり、間違えたりしたら服を一枚ずつ脱いでいくゲームです・・・。」

案の定である。

「ネギ先生、このルールで勉強させますか？」

「ううん・・・させないかな・・・。」

「と言うことで却下します。他に意見はありますか？」

するとあやかが挙手をしたので、指名する。

「でしたら、各自苦手教科の勉強をしたら良いかと思いますわ、アルク先生。」

「そうですね、それが妥当でしょう。成績優秀者の超さん、葉加瀬さん、雪広さんは教える立場に回ってみてください。人にものを教えるということも貴女方には勉強になると思いますので。」

と言うことにして、勉強会をしたのであった。

ドアをノックすると『ぬらりひょん』から返答があったので入室する。

「失礼します学園長、手紙を頂きましたがご用件は何でしょうか？」

「おお、わざわざ来てもらってすまんの、アルク君。用件なんじゃがな、アルク君は４月から正式に英語科教師として修行に励んでもらうことになったんじゃよ。」

これは予想外だった。

てっきりネギと一緒に最終課題を出されるものだと思っていたのだ。

「ありがとうございます・・・ですが、ネギには最終課題を出されていますけれど、それは？」

「うむ、それなんじゃが・・・指導教員のしずな君がおるじゃろ？アルク君は文句なしで合格らしいし、一般の先生方からも評判が良くてのう。だがネギ君は・・・これは内緒じゃぞ？しずな君としては一応合格だそうなんじゃが、一般の先生方には不評でのう・・・じゃから、居残り勉強組の勉強を見ていたから万年最下位である２－Ａが最下位を脱出したという事実が欲しいんじゃよ。」

「なるほど、そうなんですか・・・」

あの居残り授業は全教科教えていたのか・・・あれ？ネギ本当はすごいんじゃないか・・・？

「まぁ、ちぃとばかし危ないんで老骨がほんのちょいと手助けするんじゃがの・・・」

等とボソっと言っていたが俺には聞こえなかったことにする。

大方図書館島の魔法の書の噂と学年最下位のクラスの成績非優秀者は落第という非現実的な噂を流して誘導するのであろう。

「まぁ、そういうことじゃからの。アルク君は４月から正式に２－Ａ・・・来年度は３－Ａじゃの。の担任をやってもらうから、よろしく頼むぞい？勿論口外はせんようにの。わしからは以上じゃが、アルク君は他に聞きたいことはあるかの？」

「いえ、ありません。」

「なら、戻ってもいいぞい。何かあればまた呼ぶからの。ふぉふぉふぉ・・・」

「では、失礼します。」

取り敢えず、今夜は図書館島の前で張り込んで置くか・・・

夜、図書館島の図書館探検部しか知らない秘密の入り口前に一人佇む俺がいた。

時間は夜の9時を少し回った所だろうか？夕方部屋に戻ってから直に図書館島に来たのだが、詳しい場所がわからずにかなりの時間彷徨った。

かなり冷え込む上に、水溜りもあるので冷たい風が吹いてくる。

正直早く帰りたいのだが、バカレンジャー＋図書館島探検部＋ネギが来るまでの辛抱である。

寒いのは苦手だし、朝は4時半には起きてランニングをしているので部屋に戻ってさっさと眠りたい。

夕飯もまだ食べて無いのですごく空腹なのである。

簡単なものでも作ってくればよかった・・・と後悔したりするがもう遅い。

10時を過ぎたあたりでガヤガヤと人がやってくる気配がした。

「さて、こんばんは皆さん。こんな夜遅くにどちらへ行くのですか？」

「な、アルク先生・・・！？」

やってきたのはアスナ・このか・ゆえ・楓・くふぇ・まき絵・のどか・『早乙女ハルナ』・ネギと『原作』通りの８人だった。

「もう１０時を過ぎていますし、明日も学校があるんですから寮に戻りなさい。貴女達に何かあれば大変なのですから。」

主にネギと俺、だろうか？特にネギに至っては監督不届きな上に同行という非常に問題な行為になってしまうのである。

まぁ、これはバレずにいれば問題にもならないのだが・・・

「・・・わかりました・・・私たちは引き上げます・・・」

ゆえが渋々言って全員元来た道を引き返して行った。

それを確認して３０分程待ち、俺も引き上げた。

寮に戻ると、龍宮も刹那も心配して起きていたようだった。

と思いたかったのだが、どうやら夕飯が外食だったため満足出来なかったらしい。

思っていたこととは違ったが、少し嬉しかった。

自分の分を作らなくては空腹で眠れそうにないので、軽く食べられるカロリー控えめなものを作って3人で食べた。

その後は、シャワーを浴びて身体を温めて布団に潜り込んで眠ったのであった。

5歩目～麻帆良学園・図書館島を歩・・・かない・前編～（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
別の転生ネタばかりがふってきて困ります。

設定小話5アルク転生前裏話
設定初期段階ではチート能力に制限をつけて次第にその性能を知り、記憶を解放して自身を理解させようと考えていました。
しかし、チート能力は無しにしたいと思い更に制限をかけてみましたが、折角の設定である開発力が無駄になりそうだったので、チート能力の行使をさせないことにしました。

アドバイスがありましたら是非。
誤字脱字についてもありましたら教えていただけると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6336z/

双子の兄が歩く道〜ネギま！〜

2011年12月26日06時46分発行